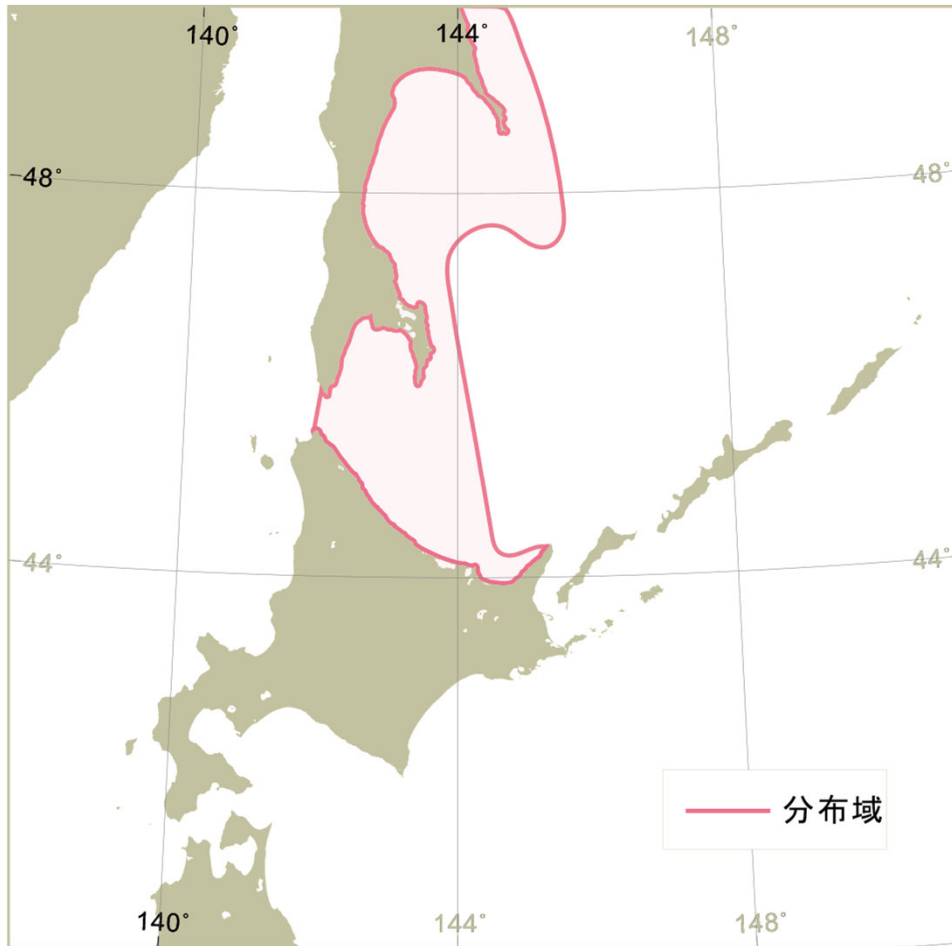




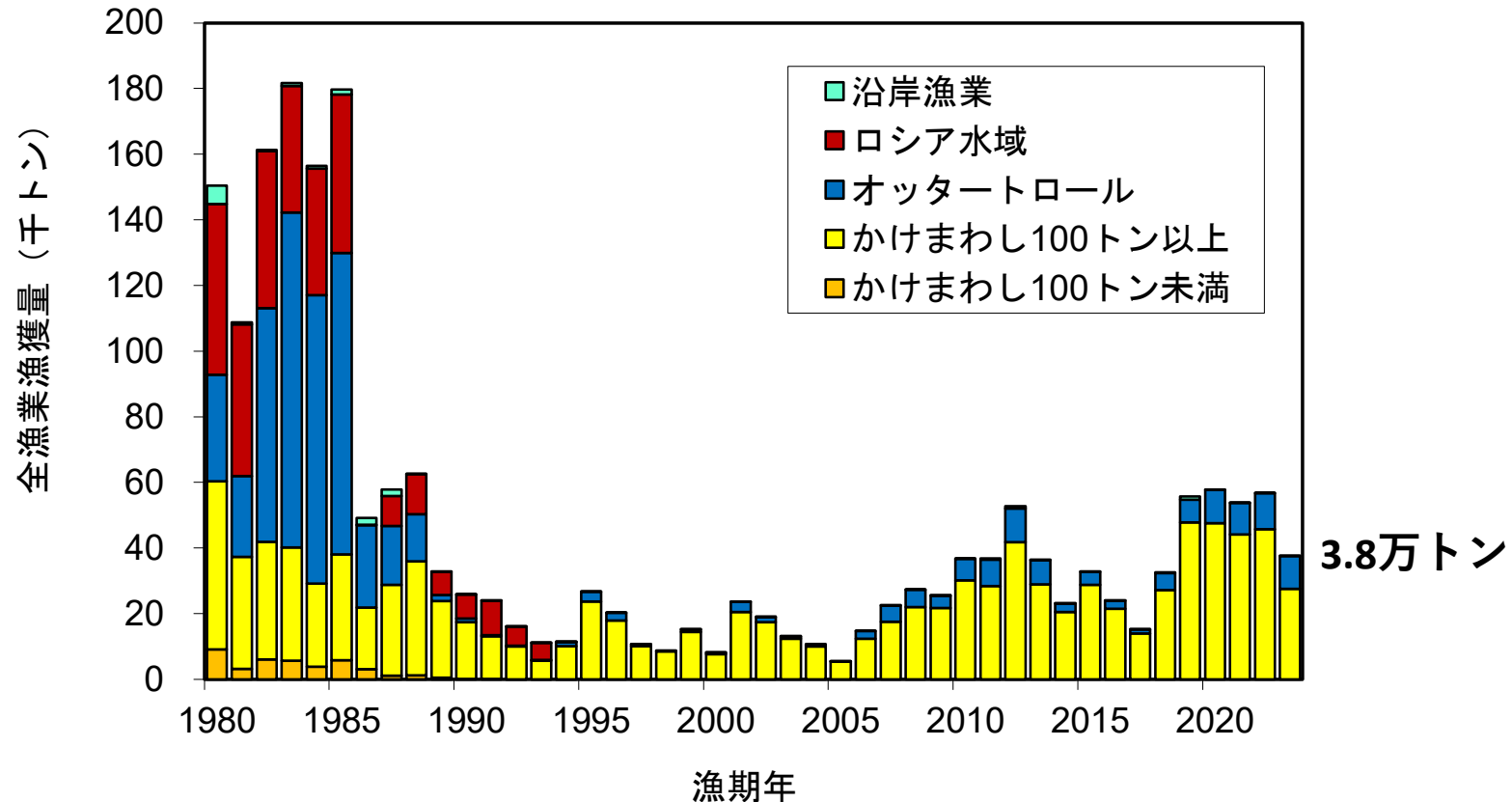
スケトウダラオホーツク海南部 令和6年度資源評価結果

生物学的特性等



- ロシアとの跨り資源
日本水域は分布の南端
- 現在は日本水域でほとんど再生産しておらず、他の海域で発生した集団からの一時的な来遊群が資源の主体
- 加入起源や系群構造など生態的に不明な点が多い
- 海洋環境や来遊状況により資源豊度は大きく変化する可能性が高く、推定困難

漁獲量の推移



- 漁期年(4～3月)の漁獲量は、80年代前半まで15万トン前後で推移したが、ロシア規制強化等で86年漁期に大きく減少、1990～2009年漁期は3万トン以下で推移
- 2006年漁期から増加したが、2013年漁期以降は減少
- 2018年漁期以降は再び増加したが、2023年漁期は減少して3.8万トン

資源評価の方法

2023年漁期（4月～翌年3月）までの漁獲データ
沖合底びき網漁業（沖底）の努力量と漁獲量



スケトウダラ狙い操業※の1網あたり漁獲量（CPUE：
資源量指標値） ※1日の漁獲量のうちスケトウダラが50%を超える日



資源管理基本方針で定められた「**維持または回復させるべき目標（3.41トン/網）**」を基準に現状評価*

* 本資源は跨がり資源であり、新漁業法に則したMSYに基づく管理基準値の設定は困難であるため



スケトウダラ（オホーツク海南部）①

スケトウダラは北太平洋に広く生息し、本評価群はこのうちオホーツク海南部に分布する群である。本資源の漁獲量等は漁期年（4月～翌年3月）の数値を示す。

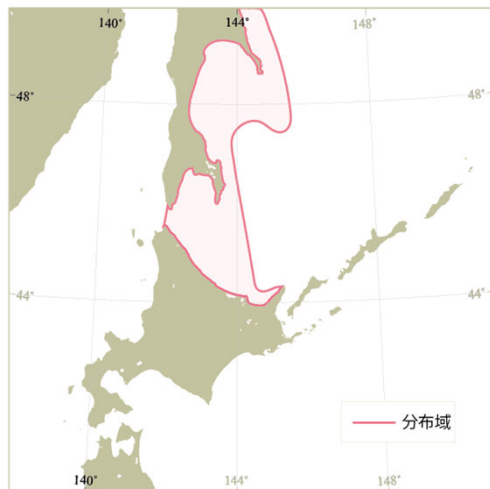


図1 分布域

本資源は日本水域とロシア水域に連続的に分布し、成長の一時期に日本水域に来遊する「跨り資源」である。

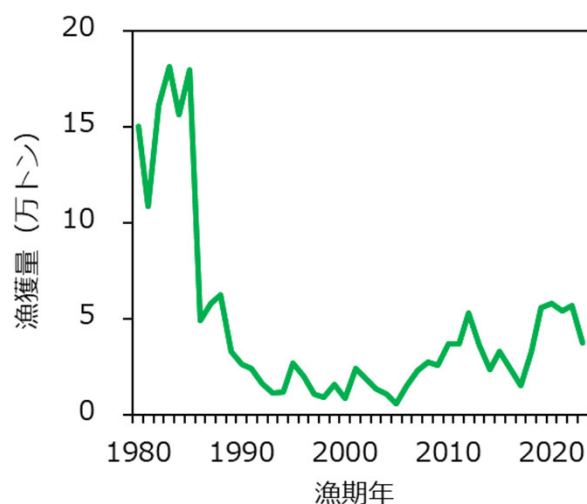
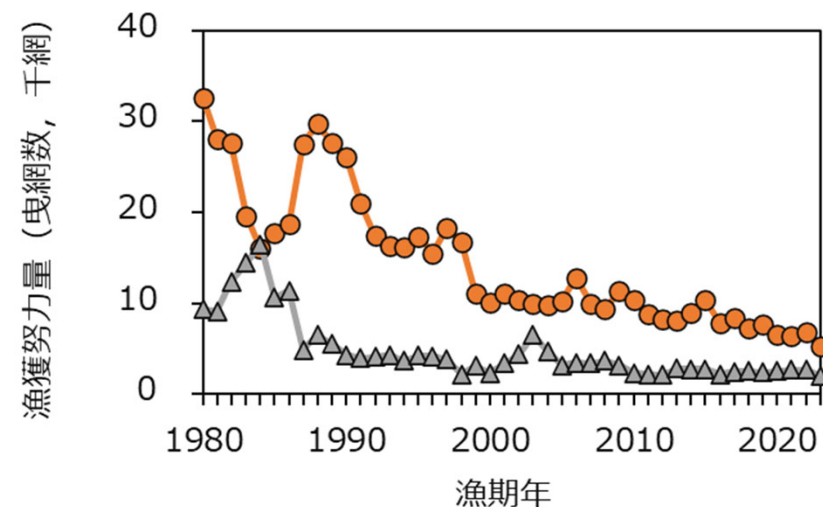


図2 漁獲量の推移

本資源の我が国による漁獲量は、ソビエト連邦（現ロシア連邦）の漁獲規制強化等で、1986年漁期に大きく減少した。近年の漁獲量は、ロシア水域からの来遊量に左右されると考えられ、2010年漁期以降は2万～5万トン台で推移している。2023年漁期は3.8万トンであった。

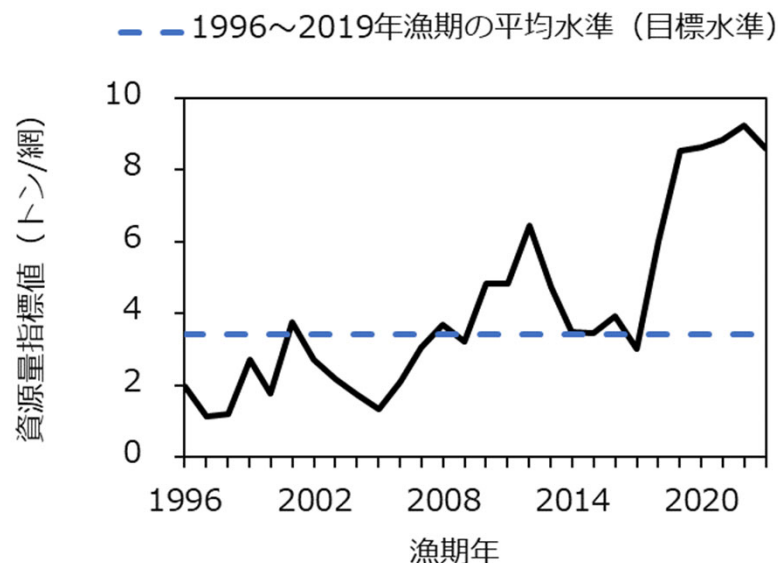


● かけまわし（100t以上） ▲ オッタートロール

図3 漁獲努力量の推移

日本水域での漁獲の大半は沖合底びき網漁業による。減船の結果、許可隻数は1986年漁期の80隻から2016年漁期以降は14隻まで減少した。オッタートロール・かけまわし漁法のいずれにおいても、漁獲努力量は過去と比較して抑制されている。

スケトウダラ（オホーツク海南部）②



本資源の漁獲シナリオについて

本資源の資源量指標値は日本水域における情報に限られ、「跨り資源」である本資源全体の動向を捉えることができないことから、最大持続生産量に関する目標管理基準値や限界管理基準値を定めることは困難である。

本資源の漁獲シナリオでは、我が国の漁船による漁獲の状況等を踏まえて、我が国漁船の操業水域に分布する資源の最適利用が図られるよう漁獲を管理するとされている。

図4 資源量指標値と目標とされる水準

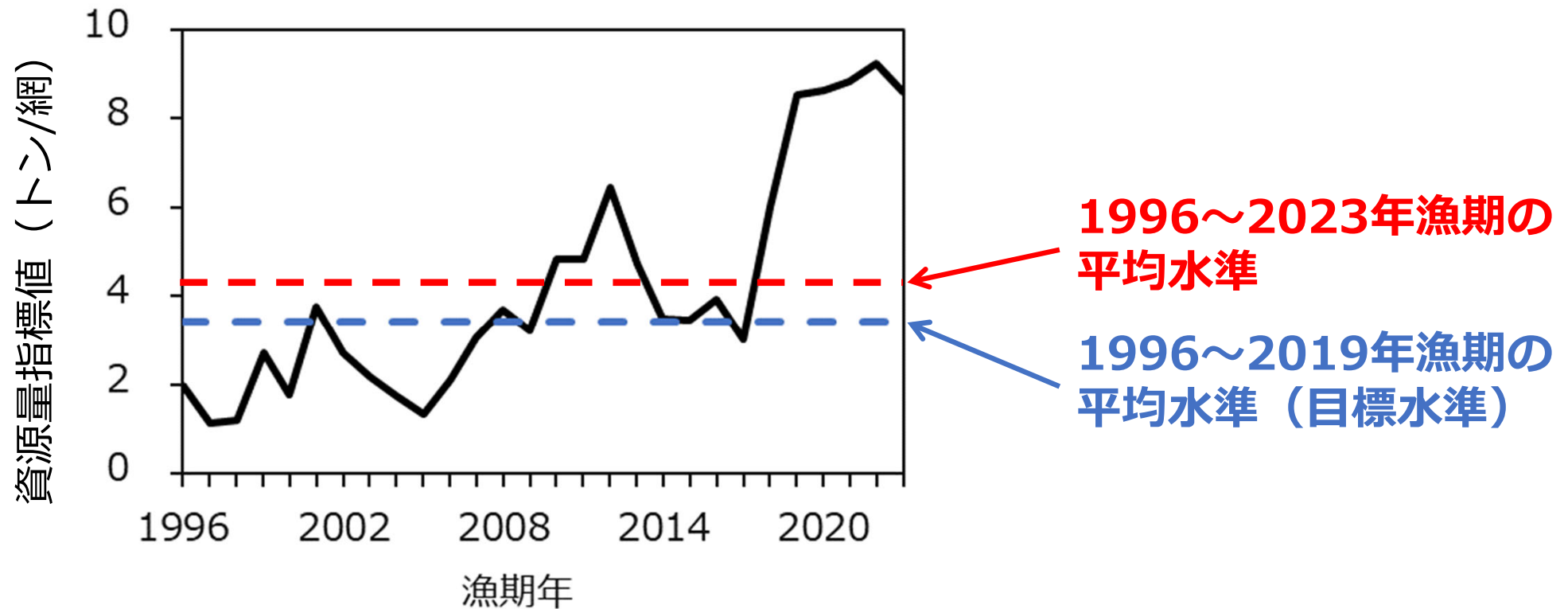
沖合底びき網漁業のかけまわし漁法による、スケトウダラ狙い操業（1日の総漁獲量に占めるスケトウダラの割合が50%を超える日の操業）の単位努力量当たり漁獲量（CPUE）を資源量指標値とした。

本資源の漁獲シナリオでは、資源量指標値の1996～2019年漁期の平均水準（3.41トン/網）を、維持または回復させるべき目標と定めている。2023年漁期の資源量指標値（8.6トン/網）はこの目標水準を上回った。

前回のSH会合前後からの資源評価手法の変遷

年度	手法
2020年度 (前回SH会合)	沖底かけまわしCPUEで、資源の推移・動向を判断。
2021年度	沖底かけまわしCPUEで、維持または回復させるべき目標に対する水準と動向を判断。
2022年度	調査船での調査現存量の表を補足資料に追加。
2023年度	変更なし
2024年度	変更なし (直近の議論) 新たなCPUE標準化手法導入に向けた課題の克服

前回のSH会合時点の目標水準のその後



- 資源量指標値の平均でみると、前回のSH会合以降上昇している
- 今年度の資源評価において最新年のデータが加わり、更新される